

# 病歴室から

森 ゆみ子

(一)

夜の九時を過ぎてもビルや商店の多い駅の周りでは明るい光が溢れている。眼下に見える国道は、車のヘッドライトの光でとぎれることない川の流れのようだ。

水上ひとみは東京都心近くにある病院の病歴管理資料室の窓から、この光景をながめていた。都会の夜を目にすると、決まって脳裏に故郷の夜が懐かしく思い出される。日暮れとともに人々は家路を急ぎ、夜も八時を廻ればしんとして闇に包まれる。そこには闇に守られた安息の時間があった……。東京に出て三年もたつのに、切れる事のないゼンマイ仕掛けの人形のような、あわただしい生活になじめないでいる。眼の前には星のかわりにネオンが瞬いている。

夜の光景を見ていると疲労のためか光が滲んで拡がった。眼をこすって大きく伸びをすると、机の上につず高く積まれたカルテの山に当たった。

「まったくもう……」

朝から続くルーチンワークの他に突然入り込んできた仕事のために帰れないでいる。無理と思える頼みを聞いて始めてみると、なかなか手がこわい。一人で残業をして四時間が過ぎていた。眼の奥にしこりが出来て軽い頭痛を感じる。

「今年の年賀状は一千枚だよ、ひとみちゃん」

そう言いながら小山医師が入って来たのは昼休みだった。変になれなれしく近付いて来た小山の厚い眼鏡の奥の眼は異様な光を宿している。

「一千枚の年賀状はさ、患者の予後の追跡調査のために出すんだよ。もう大変だよ。大変だけだよ、患者の治療開始時期と回復の度合い、予後との相関がこれではつきりする。今まで、だれも退院後の事までは調っていないだよ。これは重要な仕事になるぞ」

何かに憑かれたように言い続ける。細い体の上に乗った鉢の開いた頭がガクガクと振れる。ひとみは小山医師を見るたびに宇宙人を想像してしまふ。衣服にも食物にも全く興味がないらしい。一年間同じスーツを着て、毎日三百円の仕出し弁当を食べ続けている。ただ学問的な事柄に対しては貪欲だった。去年もある症例について興味を持ち、同様の症例報告を過去二十年分も集めた。そのほとんどの仕事が一ひとみに任されたのであった。

「そこで、水上君、僕の患者リスト作っておいてよ。こんな重要なことにかかわれるんだから喜んでやってよね。じゃあ、よ・ろ・し・く。早ければ早いほどいいよ。君は有能だからねえ。僕の知っている職員の中じゃピカイチだよ」

齒の浮くような褒め言葉は、心が籠もっていない分だけ大きかった。返答する隙をあたえず早口にまくしたてると、クルリと背中を見せて足早に去っていった。少しばかり自尊心をくすぐっておいて、無理を言う。相手の都合など聞いてはこちらが損をするばかりの態度に鼻白んだが、これも毎度のことである。

千人分の患者リストの作成と一言で言った所で容易なことではない。小山医師はリハビリテーション科が専門であった。小山のかかわった脳卒中の患者のリスト一千人分である。「これはね、病院からわざわざ年賀状が来たって患者さんは喜ぶ、資料は集まる、まさに一石二鳥の年賀状なんだよ」

と、小山は得意になって言ったが、中には病院とかわからない方もいるだろうし、すでに亡くなっている方もいるかもしれず、病院から届く年賀状が嬉しいとばかりは言えない。水上ひとみはそれでも四分の一ほどのリストを作って、今日の分は終える事にした。

帰り支度を済ませ、階下に降りると職員通用口のむこうに灯りが見えた。病理室らしい。ここは体から切り取られた臓器の一部が送り込まれ、組織を検査して診断する所である。

消し忘れたのだろうか。近付いてドアを開けると、今年研修医として入局してきた川崎守がぼんやりとした灯りの中で机に向かっていた。人気のない冷え切った室内の、そこだけ明るく照らし出された手元をしきりに動かしている。

「さあ、ホルマリンの海へ入ろう。君は何番かな。はい六番、はい君は十三番だね」

小猫をあやすような優しい声だ。斜めに見える背中と、肉片から何かを摘んで、並べたビンの中へ入れている右手が見えた。小ピンはホルマリんで満たされているらしい。小さな真珠を思わせる白っぽいものが底にたまってゆく。

あまりの無心さに、突然声をかけるのはばかられて、ひとみは半歩下がって入口の壁をノックした。川崎は顔を上げた。映画を見終わっていないのに現実の場へ引き戻された

ような、少し状況を理解するのにとまどつふうな眼をして、ああ、水上さん、と言った。

「川崎先生、まだ残っていたのですか」

川崎はひとみと同じ年の二十五歳だが、病院へ勤めてまだ一年だ。ひとみの二年後から入職したうえ、大きっぱでくつたががない。つい後輩に話すような口調で話しかけた。

「今日の胃癌の患者さんの標本作ってたんだ。全摘の人だから周りのリンパ節を取り出さなくちゃで、遅くなっちゃったなあ」

壁に掛かった時計に目をやりながら、川崎は今気付いたように言った。定時、残業などと仕事を時間で区切って働いている事務職とは、ずい分と違った仕事のありようだった。

川崎の手元には、開かれた胃がピンで台に丁寧に止めてあった。粘膜をさらけ出した体の一部は、うす汚れたピンク色をして小さな皺を無数に寄せている。ありとあらゆる食物が咀嚼され送り込まれて来た先にある袋にしては小さい。かわいらしいハート型に湾曲した線からは生き物の食欲さなど想像できなかった。縁に付いたリンパ節は二ミリくらいのもから一センチほどの大きさになるものまである。まるで貝の中の真珠を捜すように摘み上げては、番号のラベルの付いたビンに入れる。明るい灯の下で行われる手品のような作業を見ていると、この肉片が数時間前まで人の体内で血が交い活動していた事を忘れた。「あら、リンパ節って思っていたより大きいわね。それにしても全部取り出して番号順に分けるの大変ね。転移の可能性を判断するためなんだから、めんどくさがる訳にもいかないわね」

ひとみはホルマリン液の中に沈むものと浮かぶものがあるのを不思議に思いながらしばらく見つめていた。手術が終われば外科医の仕事が終わるのかと思われたが、摘出された部分の標本作りなど、その日のうちに整理しておかねばならない事が多くあるらしい。

独身で研修中の川崎は昨晚も病院で一夜を明かしていた。そして今日は二件の手術に立ち会って、指導医が帰ったあと一人で標本作りをしているのだった。

「手術も大事だけれど、こつこつ事だって重要なんだ。転移の可能性の有る無しでその後の治療方針も変わってくるのだよ。術後の予想も確実になるし……」

入局一年目のきまじめさで応えてくる。素人に向かっても、はぐらかさずに返答をする川崎の実直さが好ましく感じられた。その顔の皮膚が白んで少しばかり疲労の色が現れている。口元に生えだした不精髭が、最近の彼の生活を物語っているようだった。

「そうねえ、ほんとに御苦労さま。先生の仕事にほどほどってことはないのでしょうかうけれども、そう毎日、下宿にも帰らずに夜更かししていたら、あんまり良くないですよ。それに、

病院って言ったってこれはりっぱな客商売なんですから、さっぱりとしかなくちゃあ。

口の周り、黒ずんでいますよ」

ポンポンと言い放った。

「そつだなあ」

急に現実が押し寄せてきたような、母親の小言を聞くようなとまどいを見せて川崎は頭をかいた。

「そついえばこの前、僕の下宿でゴキブリが飢え死にしてたっけ。よっぽど何もなかったんだなあって思ったよ。まさしく寝るだけだね」

軽く笑ってくったくがない。人に緊張や身構えをさせない得な性格なのだろう。毎日飄々と生きている。風通しの良い性格にひとみもつい、口がすべってしまっつ。

「まったくあきれたものね。人間らしい生活を心がけて下さい。ペットのゴキブリのためにも。それじゃお先に失礼します」

ひとみは軽く会釈してドアを閉めた。

「あ、ちよつとまって！」室内から声がした。

あわてて近づく足音がしてドアが内側から開いた。ホルマリンとアルコールの臭いが体臭と重なって、汗が揮発性のある気体になり、鼻先を通過する。

「夕食を食べるの忘れちゃったから付き合ってくれるかな。今日は焼肉食べたい気分なんだけれど、あれって一人で食べるもんじゃないから」

「えっ、もつすぐ十時になりますよ。私ダイエットしてるんです。……お断りしたいところですが、若手医師の健全な生活のためにお供します」

他の人からの申し出なら断っていただろう夜の食事をひとみは気安く受けてしまった。

東京へ出て来てから自分でも驚くほど身構えていた。時間のテンポが速く、言葉巧みなくせに中身が薄い。人を信用していない分だけ鍵が必要なのは、都会のドアばかりではない。ひとみは安易に流されまいと気負っていた。それが、川崎には必要がない。なぜか安心感があった。

川崎があわただしく帰り支度をするのを待って外に出た。

十二月の夜の空気は冷え切っていた。街路樹の銀杏はすっかり葉を失って天を突いている。駅前のお店ではクリスマスのかざりつけで色とりどりの光の波が点いたり消えたりしてにぎにぎしい。そんな店を横目に二人はコートの襟をかき合わせて足早に歩いた。

店に着くとさっそく食べ始める。川崎は、ひとみを甘い感情を抱かずに付き合える間柄

と思つてゐるのだろうか、よく食べよく話しかけてくる。それがちつとも不快ではなかつた。肉が赤みを失つと、脂肪がにじんで香ばしい匂いを放つた。肉は次から次へと川崎の口の中へ消えてゆく。先ほどまで作業していたあのハート型に開かれたものと同じ胃袋がそれを受けとめてゐるのを想つと妙な気持ちになるが、健康な食欲はなぜか微笑ましく好ましかつた。

「川崎先生、お訊ねしますが、病理で組織のアルコール漬けを作つたすぐ後で、モツの煮込みを食べられますか」

「もちろん、うまい物はつまみ、別だよ。モツの煮込みだつて、タンだつてハツだつて」

川崎は大きな肉片をこつと高く積み上げ、上向きにした口で受けとめると大袈裟に咀嚼する。ゆっくりと喉を鳴らすと、こちらの視線に気付いて笑つた。まったく飾るという事をしない。ひとみはその無邪気さにつり込まれて笑つた。

「今日は先生、ワリカンでいいですからどうぞ気がねなく食べて下さい。先生のお給料、私よりはちよつといいかもしれません、とにかく私、二年先輩ですから」

空っぽの胃にビールが染み込んで、ひとみは饒舌になっている。

「はい、ありがとうございます。僕は哀しい研修医であります」

そう言いながら川崎はふざけてもみ手してみせた。

「ほんとの所、下宿代払つて外食するだけでぎりぎりかな」

「毎日家にも帰れず、夕食も食べ忘れるほど働いてゐるのに割に合わないわねえ」

ひとみは同情した。先月、総務課で二十万に満たない給料明細書を見たのを思い出した。

「ところで、水上さんは何でこんなに遅くまで仕事やつたの」

川崎が突然訊ねる。

「小山先生の仕事よ。急に患者のリスト千人分作つてくれつて」

ひとみは目をむいて話した。川崎も心当たりがあるといつぷうに頷く。

「すごいね。あの先生ならやるなあ、研究熱心だもの」

「君、君は有能なんだから、なるだけ早めにね、なんて言われてさつそく取り組んだといつわけよ。相手の自尊心くすぶつておいて、自分の思うとおりに事を進めるのうまいものね。でも、あれだけ色々取り組んでゐるのだから、私も尊敬してるわ。なかなかできる事じゃないもの。でもねえ……」

「そつだね。僕も小山先生の勉強熱心なのは偉いと思つてゐる。原書にもあたつてるし、自分で研究して結果をちゃんとまとめてるもの。けど、一緒に仕事したとき何となくひつ

かかるんだ。あの何でも合理的すぎるところ、違うかなって思った事もある」

と言いながら、川崎は少し首をかしげた。

ひとみも近い感じを持っている。ちゃんと勉強している医者だと解っていても自分が患者になった時、受け持つてほしくないと思う。それは自分が生身の人間だからなのだろうか。病気も含めて己れをあずけることがためらわれるのだ。

「僕ね、野口英世の伝記読んで医者になろうって思った単純男だから、小山先生とは合わないかもしれないな」

「川崎先生、それは単純というよりロマンチストって言うものよ。それにしても今どき野口英世だなんて古い……。偏差値で輪切りにされているって時代に、メルヘンだわ」

川崎のいかにも時代遅れに想える純な気持ちに心動くものがあつたが、ひとみはつい茶化してしまった。

髪の手入れもゆき届かず、左半分は盛り上り、右半分はぺしゃんこになっている。その上不精髭がまばらに生えて、いかにもずぼらでみすぼらしく見えるが、太く整った眉とその下で生き生きと表情豊かに光る瞳が、見る人に不思議と清しい印象を与えた。

ひとみの知る何人かの尊敬する医師のように川崎も、これから命のかかった瞬間を何度もくぐりぬけ、それによつて増々厳しさと優しさとを身につけていくのだろう。近くでそれを見つめていたい、ふとそんな気持ちが湧いてくる。自分でも気付かなかつた感情にとまどい、相手に気付かれまいと話題を捜した。

「あつ、そう言えば今月の死亡症例検討会に出される人、先生が内科研修をしていた時の患者さんでしょ」

「そう。小山先生と僕とで診た人だつたなあ。脳出血で倒れて運びこまれ、リハビリをして機能が回復しそうになつた矢先に亡くなつた……。ちょっと不可解なところが残つた患者さんだつた」

そう言つと川崎は考え込むような眼をしてしばらく口を噤んだ。

死亡症例検討会は、死後行なつた解剖の結果の報告と、その内容に対して医局員全員が参加して行なつ検討会である。

患者の治療は担当した医者にほとんど任せられる。医学の分野が専門化し、細分化されているので多分野に渉る疾病を持つ患者の場合などはチームが組まれるが、そこでも主治医が治療方針を決めてゆくのが一般的だ。治療が患者にとつてふさわしい行為であるかないかは、患者自身はもちろん、他の医療関係者にも知らされる機会は少ない。

医師は自分の良心と持っている知識と技術で最善をつくす……その信頼のもとに成り立っているのが医療なのだ。患者も医者もそう信じるからこそ身を任し任されるのだろう。ひとみの勤務する病院に病理専門の医師として杉並が着任して、少しばかり状況が変わった。死後、家族の了承が取れた場合、患者の体を解剖し全身に涉って調べ報告するようになった。この剖検報告によって、医療行為が科学的に検証される。治療が功を奏していたのかいなかったのか、死因は何であったのかなど、死後解剖された臓器の変化によって知ることができるからである。

死亡症例検討会に臨む医師たちの間には、張りつめた空気が漂っている。卒後間もない若手医師たちは目を輝かせてその場に参加した。彼らにとつてこれほど生々しい学習の場は他にない。病歴室に務める水上ひとみも第一回目からその場に居合わせることとなった。そこは、死を通して病と生とをみつめる場に相違なかった。

この病院で初めて行われた死亡症例検討会の様子を今でも鮮明に思い出すことができる。まず、患者の治療経過が主治医から報告される。続いて杉並医師から剖検報告が伝えられた。各臓器の状態、うつ血の有無や萎縮の度合などが次々と告げられた。患者は慢性白血病の女性であった。三十五才で発病し、その後一十九年間で生存した。治療、緩快、発病をくり返しながらも、患者は仕事を続け、子育てを終えている。

「白血病には様々なタイプがありますがこの症例は慢性リンパ性白血病でした。治療することはありませんでしたが、適切な治療による緩快状態の維持がここまで続けられるという良い例でした。天寿を全うしたと言つには語弊がありますが、医療が病魔の手口を防ぎながらここまで彼女の人生を送らせて来たと言つても過言ではないでしょう」

報告の終わりに語られた杉並医師の言葉が、ひとみの耳に今でも残っている。患者の数冊にも及ぶ分厚いカルテが傍にある。これは患者の人生でもあり、医師と病魔との長い駆け引きの記録でもあった。読みづらい文字の、まるで暗号と符号との羅列のような記録の中に医師の必死な作業がうかがわれた。

ひとみの仕事は、病歴管理資料室という、いふなればカルテの倉庫番である。退院をした患者のカルテはこちらに回され、整理保管される。入退院をくり返す患者にとって以前のカルテは重要な資料だった。レントゲンや心電図などの資料も含めてきちんと保管しておかなければならない。

杉並医師の着任により、単調な倉庫番の仕事にはりあいがでた。杉並はけっして甘言など言わないが、ひとみの丁寧な仕事ぶりを評価してくれる。何にも増してその仕事を理解

し、必要とする人がいるのは嬉しかった。彼の要求する資料をきちんと出せる度に、仕事に対して自信とはずみが増していくのが分った。

杉並医師は以前、大学の医学研究所に務めていたらしい。四十歳代かと思われるが、物腰も穏やかで温かく包みこむような笑顔が印象的だった。

ホルマリンとアルコールの臭いのきつい部屋の扉を開けたとたん目に入る、病んだ臓器のビン詰め、癌におかされたらしい組織の切片。プレパラートに乗った細胞、こんなものに囲まれて平気で仕事のできる者はどこか神経に偏りがあるのではないか。すでに息たえた人間の体を腑分けしてさらに切り刻む、もちろん医療行為だとは理解していても想像するだけで寒気がした。しかし杉並医師が病理室に就任して以来、異界とも思えたこの部屋が急に温かい色彩を交えて目に映ってきた。

「僕の娘がね、『私のお父ちゃんは死んだ人を生き返らせるお仕事してるんだ』ってみんなに言いふらして回るので困った事があつたけれど、その時少し嬉しかったなあ」

新任歓迎会の席で、杉並が強くもないらしい酒に顔を赤らめながら言った言葉だった。

「死んだ人を活かす……」自分でも口にしてみると、何だか少し照れくさかったが、言った後で妙に明るい気持ちになった。

(11)

一九八〇年も暮れようとしていた。いつの間にか、店頭の飾り付けもクリスマスから歳末へ変わっている。行き交う人々の顔にも師走のあわただしさが張り付いていて、寒さでちぢこまった首が前のめりになって通り過ぎてゆく。

東京も国道を少し入ると下町の風情を残している所がある。ひとみはそんな商店街でよく買い物をした。八百屋で大根と里芋を買ひ、向かいの肉屋で豚肉を包んでもらった。土曜日の午後の楽しみだった。

「こんにちは」

背後から女性の声が出た。振り返ると、どこかで会ったことのある顔だった。

「小山です。主人がいつもお世話になって」

くりんとしたまん丸い眼。思い出した。半年ほど前に病院の玄関で会って言葉を交わした記憶がある。宇宙人を思わせる小山と対照的な、活き活きと弾むような眼をしている。

「いいえ、こちらこそ、いつもお世話になっております。あのう、近くにお住いですか」

「ええ、この少し先を左に入った所です」

「あら、私もあなたも仕事が忙しくてすれ違っても気付かなかったのかもしいわね。」

今私、サンデー毎日なの」

と言いながら彼女は腹部に手をあてた。産休に入って家にいるという事らしい。自分の足先が見えないのではないかと思われるほどに小山の妻の腹は膨らんでいる。鼓笛隊の奏者のように、ちょっと体を反らせて歩く姿は、この世に怖い物など何もないと言つぷうな自信と輝きに満ちていた。二十五才の筋張った体付きのひとみは、眩しいものを見るように目を細めた。

「あの、いつごろお生まれになるの」

ひとみは遠慮がちに尋ねた。

「来月初めなの。きつと女の子よ」

彼女は嬉しそうにククツと笑った。大事なものを抱えている体が、たわわな木のようにコサユサと揺れた。

「新年早々だなんて、ほんとうにおめでたいわ」

桜色をした、ふわふわの暖かい存在を想像するだけで胸が熱くなった。

「あのう、おいしい紅茶があるの。ひまを作つてぜひ遊びに来て下さいな」

小山の妻は路ゆく人も気にせず、快活なはっきりした声で話しかけてくる。

「ええ、でも小山先生、お宅でも勉強なさつているでしょう。お邪魔じゃないかしら」

くつたくのない話し方に引かれて、つい返事をしそうになったが、職場を離れてまで小山医師に会うのはごめんだつた。

「あの人は関係ないの。自分の部屋で勉強させておけばそれでいいのよ。あの人は勉強しすぎて死んじゃうつていうのが似合っているの」

いかにもキツパリと言いつつ、声をたてて笑つた。小山の子の宿っている腹もそれにつれてフクフクと震える。

往来での立ち話にしてはきつい冗談だつた。ひとみは、ギクリとして、話の真意を計りそこねた。言葉を失つたまま思わず相手の顔を見返したが、あい変わらず、くりんとした丸い目は、漫談の後のように笑っている。

職場で文句を言つたりすると必ず「女子と小人は養いがたし」などと言つて自分の非を認めようとしないうる小山は、その実、どうしようもない宿六なのだろう。鼻息の荒さも、白を黒と言いくるめる弁舌も、伝説の孫悟空の無邪気さに似通つている。どっしりとした妻の掌の中で懸命に走り回る滑稽な姿が思われた。男と女のかかわりにはひとみの想像もつかない不可解な、それでいて一様ではない深いものがあるのだろう。

軽く会釈をして過ぎ去る彼女の後姿はそれにしても幸せそうであった。

言い放たれた言葉とはまったく逆の余韻がひとみの中に残った。職場では知れない小山医師の一面を観た気がした。

歳末の商店街は人の数とともに活気を増していった。

(三)

日曜日、ひとみは約束があった。

気ぜわしく外出の用意をして通りに出た。開店前の商店街はシャッターを降ろし、しんとしていた。街灯の柱に取り付けたお飾りや垂れ幕が北風にひやらひやらとなびいて淋しさをつのらせる。赤や桃色のビニールで出来た安っぽいお飾りは、その下で動き回る人影があつてこそ、にぎやかに見えるものらしい。人通りのない路地を抜けると駅だった。

ひとみは電車に座ると、急に不安になってきた。これからどう振舞ったらいいのか分らない。身なりのあまりの粗末さも気になり出した。初めてのデートだというのに、紺のコートに白いセーター、下はデニムのジーパンだった。バッグの中からもより少し赤めの口紅を出すと、人の視線から身を隠すようにして唇をなぞった。

約束の時間の十五分前に着いたが、川崎はすでに待っていた。着くまでに湧いた不安は川崎の顔を見たときに消えていった。薄暗い店内で、ひとみを確認すると、勢いよく立ち上がった。薄闇に川崎の掌が白い蝶のように動く。コーヒーマシンの沸く香しい匂いが、あたりに漂って、静かに音楽が流れている。

「おはようございます」

ひとみは、そう言ったなり、下を向いてしまった。

こちらの気持ちを知ってか知らずか、川崎はいつもと変わらぬ態度でくったくなく話し掛ける。室内の暗さに眼が慣れてくると、照明のせいかわかると川崎の顔がやけに青白く気になった。とたん、しおらしい気持ちやひかえめな態度が失せた。四人姉弟の一番上で育ったせいか、どうも相手が困った立場だったり、弱っていたりすると姉さん意識が頭をもたげる。「川崎先生、少し顔色が悪いようですが、昨晚も遅かったのですか」

問いながら川崎を正面から見直した。昨日と同じ服を着ているつえに、ワイシャツには無数の皺が寄っていた。

「さあ帰ろう」と思っている所に病棟から連絡があつて、術後の患者さんの血圧が下がつて来たといつので輸血の指示を出したり処置をしたりしていたら、当直の先生にちょっと手を貸してくれって呼ばれちゃって……。終ったら四時を過ぎてたかな。それから帰って

寝ると起きられそうもなかったので、深夜喫茶で夜明かしたんだ」

弱弱しく笑った。川崎の体からタバコの香りがきつく漂ってきた。

連絡してくれればと言おうとして詰まった。

「ごめんなさい。大丈夫ですか。このまま帰りましょうか」

混乱したまま問いかける。深夜喫茶で夜明かしまでして待っていてくれるなど予想もしていなかった。何ともすまないような心苦しさがつのってこのまま帰るのが一番良いのではないかと思えてくる。

「いや、僕もたまには息ぬきも必要だと思って……。別に何ていう事もないよ。今日は初めて病院へ行かない記念すべき日にするつもり」

「まあ、川崎先生、毎日病院に行っていたのですか」

「そう、日曜も祭日も、とりあえず病院へ行って手術の後の患者さんの包帯交換とか輸液や何かの指示をしたり」

四月に入局した川崎が一日も休まず仕事をしていたのを初めて知った。少し不合理なことに思える。労働組合はすでに四週五休の勤務体制を創り上げているのに……。

「当直や日直の先生にやっていただくわけにはいかないんですか」

「内科の先生に術後の管理は無理だよ」

「じゃあ、外科の先生方で交代にするとか」

ひとみはつい、口を出してしまっ。

「一心それは研修医の仕事だから」

今さら言われても、どうしようもないといった顔で川崎が応える。

「へーえ、まるで徒弟制度じゃない」

他人事ながら少し腹立たしくなっている。

「先生方も労組には入っているのですよ」

ひとみの中の正義感が出口を捜して走り廻った。こちらの気配を感じてか川崎が困ったように言っ。

「うん、労組には入っているけれど、医者は労働基準法に含まれていないんだよ」

ふいに、出口をふさがれてしまった。思考が急停止をする。

「看護婦さんの夜勤には、入りも、明けも有るのに、先生方はその日の朝から次の日の夜まで……夜勤をするってことは三十六時間くらいぶっ続けて働いている……そう言うことなんだ……」

独り言をつぶやきながら医療現場の舞台裏に気付いて何だか哀しくなってきた。そういえば今まで夜勤の後で代休を取った医者など見たこともない。日曜日勤のあとでさえ、月曜日からのいつもの一週間が続いている。休もうと思っても外来や検査などが詰まっていた。実際は休むなど不可能なのだった。

目の前の蒼白い顔を見ていると改めてその仕事の大変さに思い至った。

「日本の医療なんて医者犠牲の上に成り立っているのかもしれないなあ。でも、いやいややらされている訳じゃないから、それほど苦にならないよ」

事もなげに言つと、川崎はコーヒーを飲み干した。時計に眼をやると伝票を持った。

「さあ、せっかくだから出かけよう」

勢いよく立ち上がると、さっさと歩き出している。ひとみもあわてて後を追った。

新宿歌舞伎町は様々な格好をした若者でにぎわっていた。パチンコ店の自動ドアが開閉する度に漏れてくる重艦マーチ。ゲームセンターから聞こえる嬌声や電子音が重なって、年末の繁華街はカラスの巢をつついたような、さわがしさだった。

ひとみは人波にもまれて歩くのが苦手だった。ぶつからないように人を避けているうちに川崎からつい遅れる。何度かくり返すと、ぐいと川崎が手を引いた。それでも行き交う人に肩をぶつけながら、夢中で歩く。川崎に握られた手が熱を持って、意識がそこばかりに向かった。すると辺りの騒がしさが急に遠のくような不思議な感じがした。

映画館も多くの人でにぎわっていた。幸い二つ並んだ空席を見付けて、急いで座った。横に座る川崎の体温が微かに伝わってくる。うれしいのになぜか逃げ出したいような気になる。気付かれない様にそっと深呼吸をして、正面のスクリーンを見た。

映画はコミカルに進んでゆく。浅草の下町風情と人情が見ている者をなつかしい気持ちにさせる。しばらくすると隣に座って映画を観ている川崎の頭が、かすかに肩に触れてきた。首を回して見ると、懸命にこらえてはいるものの、ついウトウトとしているらしい。真つすぐ前を見ていたかと思つとクラツと揺れる。ひとみは声をかけずにそっと動かないように気遣った。映画はクライマックスに差しかかる。マドンナ役女優に打ち明けようとするが、なかなかそのチャンスがない。だれもが歯痒い思いで画面に見入っているその時、聞きなれない電子音がした。

川崎はとたんにビクリと体をひきしめ、腰に付いたポケットベルのスイッチを手早く止めると、あたふたと廊下に出ていった。ひとみも座席を立つと背を低くして後に続いた。人気のないロビーの端に電話をしている川崎の緊張した背中があった。

「……あ、そうですか、解りました。十一時三十分ですね」

川崎は受話器をもどすとひとみの方を向いた。顔が残念そうにゆがんだ。

「大腸の穿孔らしい。今から緊急オペをするので病院へ行かなくちゃ……」ごめん

「私がかまわないわ。命にかかわることでしょう。どうぞ急いで」

川崎はすでに切り換えができたらしい顔付きをしていた。眉と眼とに力が入っている。

ひとみは、国道でタクシーを拾って乗り込む川崎を見送った。独り取り残されてみるとあ  
たりの騒がしさがまた押し寄せてきた。今日を消費してゆくのに夢中になっている青年の、  
他に使い道のないエネルギーの波が騒音とともにひとみを襲った。こつたがえしている何  
十、何百という人の中に知る人の一人もいないのに今さらながら気付いて恐ろしくなった。  
人の命の前には全ての物が重みと価値を失っていく。予定も約束も家庭も……。人命を  
ひつ担いだ医者と言つ職業の男と生活を共にする者の苦勞と孤独が近寄ってきた。

「あの人は関係ないの」

商店街で出会った小山医師の奥さんの言葉が蘇る。あれはこついつことだったのかもし  
れない。自分には、笑いながら全てのことをやり過す知恵も、人命という重い荷物こと  
背負い込む強さもありそうになかった。白のセーターの上に紺のオーバーをまとつたいか  
にも場違いな自分を意識しながら、下を向いて、駅への道を急いだ。路上にだれかの吐瀉  
物がへばり付いて、猥雑な街をより一層つす汚くみせていた。

#### (四)

水上ひとみは六階にある医局会議室へ向つて階段を上がった。外来診察室のある一階は  
往來のような賑やかさと駅の待合室を思わせる密度とがあつたが、病院も階を上がるにし  
たがって静かな落ち着きを漂わせてくる。病院の建物は壁も天井も真白く塗られていて、  
床までが白いリノリウムであつた。入ってくる光の全てを反射して室内に取り込もつとし  
ているのだろうか。まるで、病 というイメージからくる暗さを、明るさと清潔さで懸命  
に追い払おうとしているようだった。四階の踊り場で立ち止まると、窓から小春日和を思  
わせる穏やかな風景が望めた。落葉した樹木の向こうに高いビルが林のように眼に映る。  
ひとみは軽く息を吸い込むと一気に六階まで駆け上った。

医局会議室には医師と病棟看護婦長、レントゲンの責任者が集まっていた。水上ひとみ  
は一番端に資料をそろえて座つた。参加者のだれもが剖検結果を知らされていない。

死に至る事態の科学的検証の場に臨む緊張が参加者に取り付いて、会議室の空気を重い  
ものにしてている。眼に見えない海水が、ぐんぐんとその高さを増して、海面が目線まで迫

って来ているような緊張感を覚えた。

全員がそろったところで、医局長が口を開いた。

「それでは死亡症例検討会を始めます。小山先生、入院中の経過報告をお願いします」

小山医師は、ぎよろりと目の玉を動かした。集まったみなを見渡すと、少し背中を反って立った。軽く咳払いをして説明が始まった。

「えー、患者は六五歳男、糖尿病があります。家族歴は特記すべきことはありません。嗜好として、アルコール毎日一合程度、タバコは一日二十本です。九月十三日早朝、救急車にて来院し、そのまま入院となりました。入院時の理学所見の詳しい内容はお渡ししてあります資料のナンバー（一）にある通りです」

入院時理学所見と書かれた資料には、血液、尿の検査の結果から体温、血圧、意識状態、皮膚、眼、口腔、胸部、四肢の所見までが書かれてあった。

「来院時、血圧は百三十の七十と正常であり右足の腱反射の更進と右片麻痺を認めました。意識は鮮明であり、髄液を調べた所、血性ではないので左側の脳血栓を考えました」

小山医師は落ち着いた声で続ける。脳血栓による右片麻痺ならば発症直後からリハビリテーションを始めるはずであった。

C・Tによる脳の断面の映像が提示されると医局長は一斉に近づいて、梗塞の部位を確認した。それは不鮮明な写真で、脳が輪切りにされた白黒のトマトに思えるだけで素人が見て解るものではなかった。

「血栓溶解剤を使用しながら、入院直後からのベッド上のリハビリを行ないました。その後も順調にリハビリを行い二十日後の十月三日には軽度の麻痺は残るものの杖を使った歩行が可能なまでの回復がみられました。しかし十月五日、機能訓練中に不快を訴え、その後全身症状が急激に増悪をたどり、十月六日死亡を確認致しました。脳血栓の再発による死亡と判断致しました」

小山医師は一通りの説明を終え、ほっとしたふうに顔を上げた。厚い眼鏡の奥の眼は、暗い淵のように無表情で感情の光を一つも送ってこない。何を考えているのだろうか、ひとみは不安になった。治療回復の矢先の死亡なのだ。人間の体なんてそんなに単純じゃないとも想えるし、予測不可能なことも多いとは思って……。

「治療経過について何かありますか」

医局長が周囲を見渡して問う。紙をめくる音がしばらく続いた。

「何かありましたら剖検報告の後でも言ってお下さい。それでは杉並先生お願いします」

司会に指名され、杉並医師はまず「剖検診断報告書」というプリントを全員に配った。剖検番号から始まるこの書類は、身長体重、各臓器の大きさ、重さ等が子細に記録されていた。剖検報告が進みいよいよ剖検診断に至る。室内の空気が密度を増した。「心臓、左前下行枝に分岐後ほぼ100%の狭さくがあり、下壁から中隔にかけての広範な梗塞巣を認める。よって十月五日、六日の急激な変化は心筋梗塞によるものです」杉並の報告後、張りつめていた空気が急に揺らいだ。もう一度資料に目を通す者、小声で私語を交わす者もあり、ざわついている。

臨床診断において脳血栓による死亡と判断していたが、実は心筋梗塞によるものだった。そこで司会をしている医局長が、循環器の先生方からその点についての意見はありませんか、と意見を求める。すぐには声が上がらないが、しばらくして循環器を専門にしている内科の医師が発言した。

「九月二十日の心電図を見ますと虚血性心疾患を疑う必要のある波が現れています。リハビリテーション中に胸苦しさを訴えはありませんでしたか」

「胸の痛みや胸苦しさは訴えていませんでした」

小山医師は落ち着いた声で応える。

「糖尿病がある場合、胸痛が時に単なる不快感として自覚される事がありますが、そういった様子はありませんでしたか」

「僕の方には訴えはありませんでした。けれど、看護婦には何か言っているかもしれないかもしれません」

と言って小山は婦長の方を見つめた。婦長はあわてて書類を寄せた。しばらく看護記録を捲る音だけが伝って来る。

「あの……九月二十日の看護記録に、歩行訓練中、不快感あり中断、という記載があります」

病棟看護婦長が応えた。自分の発言の責任の重さに押しつぶされたような擦れた声をしていた。彼女はそれだけをしゃべると開放されたようにストンと着席した。

「脳のダメージは大変大きな問題ですが、リハビリを行なうさいの心電図に気を配る必要を感じます」

別の内科医からも意見があった。小山医師がふいに立ち上がり、口を開いた。

「僕は、過去十年の間、脳卒中の統計を探っています。それは先月学会でも発表し話題にもなりましたが、発症直後からのリハビリは機能回復にとって最も重要なことです。リハ

ビリを開始する時期と回復の範囲は相関してゆくのです。これは僕の患者の症例全部の統計から出た結論です。したがって、この患者にも一日でも一時間でも早くリハビリを施行するのが私のやるべきことだと考えましたので……」

いつもの無表情な眼玉に何だか憑き物が憑いたような物言いは、学生時代ヘルメットをかぶってハンドマイクで叫んでいた人達に似ていた。人は白を黒と言いくるめようとする、こんなふうな眼付きになるらしい。

心電図の変化についての意見だったはずだが……ひとみは会議のなりゆきに注意を払い辺りを見回した。

医局長は解ったというふうに静かにかぶりを振って、続きそうになる話を手で制した。地域に密着した医療の現場は、まさに修羅場である。午前半日に日によっては一人で五十人を越す患者の訴えを聞き診断を下し、検査や薬の指示を出す。午後は検査やレントゲンに入ったり、病棟の入院患者の診察や指示、レントゲンの読映会等が続いている。月初めにはこれに外来、入院全部の保険請求のためのレセプトの点検があった。

そこにあつてなお、小山医師は患者の統計に取り組み、独自の治療基準をつくっていた。これは脳卒中後の治療基準として優れていると評価されている。大学病院のような所なら可能な取り組みも、地域に根を置く病院ではなかなか出来ることではなかった。彼の努力を知らない者はいない。医局長もそんなことは十分に理解していると云った顔をしている。

「ところで小山先生、十月五日、患者の心電図に眼を通しましたか」

医局長は包み込むような穏やかな声で、ゆっくり問った。

「はい」

小山医師は短く返事をした。

「それで小山先生、何も感じませんでしたか」

「……」

ひとみは体がこわ張るのを感じた。命をあずかる者の厳しさを肌で感じ、恐ろしさで逃げ出したくなった。汗が噴き出しているのを感じる。

日頃変化の乏しい小山の眼に暗い色が映った。いつもの饒舌さは消えていた。

「心電図上で aVFでST波の上昇がみられますが、これは明らかに下壁の梗塞を疑うべきです」

医局長は静かに淡々とした口調で続けた。青年医師たちの懸命に記録を取る姿がひとみの眼に映る。死んでしまった人から学ぼうとする姿勢が彼らの中にあつた。小山の非をと

がめるために集まっている訳ではなかった。死体の語る事実の前に医師たちは謙虚になる。どんな言葉より雄弁に彼らの医療行為を死体は評価しているからである。

「患者さんの変化の激しさから、脳梗塞の再発、それも脳幹部の梗塞を疑うと言つのはいたって自然ですが……。ただ、この方の場合、剖検をした心臓の狭窄は非常に劇的なものであったことを物語っています。したがって循環器の先生方が適切な診断を下して対応してもこの患者さんは救えたかどうか……たぶん無理だったでしょう」

杉並医師が言葉をそえた。会場にホツとした空気が流れる。

医師が知っている限りの知識と体験を集め、いかに最善をつくそつとも、それが必ずベストな選択とも限らず、まして結果が思い通りに付いてくるわけでもない。

事実は事実として科学的に受け入れるということを知っている者たちの集まりは、終われば何事もなかったかのように散っていった。

水上ひとみは、会議室に残った資料を片づけながら、まだ自分の胸が熱く速くなっているのにとまどった。ふと窓の外を見上げると、暮れかかった空にムクドリの飛んで行くのが見えた。筋雲に夕焼けがかかって美しい朱鷺色をしていた。黒い小さな集団になって飛び行く様になつかしさを覚えたが、鳥の飛ぶすぐ下には都会のひしめきあつた家々の屋根がある。

杉並医師や医局長の穏やかな厳しさが、ひとみに何とも言えぬ感慨をあたえていた。それが何なのかはつきりとは解ぬまでも、医療とかわるごとの重さに正面から向きあつていく潔さに通じるものに違いなかった。

人気がない病歴室にもどると少し落ち着いた。室内は到る所にカルテが置かれている。

ひとみの手にした厚いカルテは検査結果の伝票が挟み込まれて不細工にふくらんでいた。人によって、それは治癒全快の記録でもあり、また人生末期の記録でもあるのだ。

「死者をいかす」ふと杉並医師の言葉が思い出された。なぜかとても厳肅な気持になった。